平成 23 年 3 月 27 日

気仙沼地区の避難所・救護所巡回報告

東北大学大学院内科病態学講座 感染制御・検査診断学分野
東北大学大学院 感染症診療地域連携講座
徳田浩一、遠藤史郎、八田益充、賀来満夫

気仙沼地区には、17 の救護所を含め、約 100 か所の避難所が存在する。

3 月 24 日に気仙沼地区の避難所・救護所を巡回し、感染症対策の確認を実施した。各施設の訪問に先立ち、気仙沼市立病院院長、気仙沼市役所危機管理課及び唐桑総合支所の災害対策本部で避難所と救護所に関する情報収集を行い、訪問すべき施設を決定した。

（訪問者）八田、遠藤、徳田
赤坂保健師（宮城県保健福祉部疾病・感染症対策室）
大崎保健師（気仙沼保健所）

（訪問先）鮪立老人憩いの家（112 人）、小原木中学校（213 人）、鹿折中学校（150～200 人）、K-WAVE（約 1000 人） ※避難者数は 3 月 23 日現在

1. 概要

・体育館などの狭い空間に、多数の避難者が密な状態で居住している。
・上下水道は復旧しておらず、食事前やトイレ後の流水による手洗いは多くの避難所で困難であった。またアルコール手指消毒剤も物品不足や不十分な理解により確実には実践されていなかった。

2. 感染症・感染対策の現状

・マスクやアルコール手指消毒剤などの物資は充足しつつある。
・いくつかの避難所では水が使用可能、あるいは給水車からの水を食品・調理器具の洗浄などに制限して使用するなど、効果的な使用方法により感染対策が実施されていた。
・避難者の健康状態について、避難所の管理者（リーダー）やボランティアの

看護師、医療支援チームが把握しており、体調不良者の早期探知が多くの避難所である程度可能となっている。
・巡回した避難所では、K-WAVE を除いて明らかな呼吸器・消化器感染症の流行は認められなかった。患者発生時には、医療支援チームや地元の医療機関による診察が受けられるなど、医療面でも大きな問題点はなかった。

3. 総括と課題
・鮪立老人憩いの家や小原木中学校の避難者はもともとの地区の住民がほとんどであり、避難所においても統率がとれていた一方で、今回インフルエンザが発生した K-WAVE では、いろんな地区から避難者が集まり、規模も大きいことから統率がとりにくく、感染管理の面で対応策の徹底が困難な印象であった。避難所生活の長期化が想定されるため、避難者への感染対策の周知と実践が重要と考えられる。
・行政主導で避難所の感染管理を行っていく必要があると思われるが、行政側も人手不足（被災者も多い）であり、気仙沼市と宮城県、さらに行政外の組織などとも連携して、避難所の感染管理を効率的・効果的に継続してゆくシステムづくりが重要と思われる。

〔各避難所・救護所の現状〕
<u>鮪立老人憩いの家（112 人）</u>
・大広間で生活している。隔離に使える部屋はない。
・水道、ガス、電気は復旧していない。給水車により配布される水を沸かし、食材や調理器具などの洗浄は可能。トイレ後の手洗いは困難。マスク、アルコール手指消毒剤は不足していたが、充足されつつある。環境用消毒薬として有効な次亜塩素酸 Na が不足していた。
・リーダーが（地域の一般女性)、衛生・生活管理を実施しており、統率がとれている。廃棄物処理やトイレの清掃も問題なし。狭いが、行き届いた印象。
・感染症の有症者も把握している。現在、軽度の咳が数名いる以外、特にインフルエンザや胃腸炎の流行はない。
・避難所であり、医療従事者や保健師の訪問はこれまでなかった。3 月 23 日に地元の診療所（小野医院）が、3 月 24 日に同医院へ受診用の巡回バスが再開した。

- 支援物資（アルコール手指消毒剤とサージカルマスク）を渡し、避難者 20〜30 人に対してアルコール手指消毒剤とサージカルマスクの使用方法の実演を行った。

<u>小原木中学校</u>

・体育館で生活しており、個人・家族間の距離は近い。

・水道、ガス、電気は復旧していないが、山から水を引き、発電機を稼働させ、ある程度の水と電気が使え始めた。トイレ後の手洗いは、屋内トイレでは可能となった。マスク、アルコール手指消毒剤もほぼ充足されている。

・医療支援チームが継続的な医療支援を行っている（奈良県チーム、4 月末まで滞在予定）。咳をする人が数人いるが、呼吸器・消化器感染症の流行はなし。近隣医療機関は小野医院であり、同医院医師の訪問も時々あり。

・避難者全員の協力のもと組織立てて（食料班、燃料班、医療・衛生班、総務班など）生活しており、統率が良くとれている印象であった。

・医療・衛生班には 6 人が配置され、ほぼ全員看護師である。

鹿折中学校

・体育館で生活しており、個人・家族間の距離は近い。隔離用の部屋が 1 室ある。

・水道、ガス、電気は復旧していない。トイレ後の手洗いは困難。マスク、アルコール手指消毒剤はほぼ充足されている。

・自衛隊の活動拠点となっているおり、食事が毎回配給されているため、避難者が調理することはない。

・看護協会からの派遣 3 人と横浜市からの医療支援チームが継続的に医療支援を行っている。インフルエンザが 1～2 人いるが、多くはない。消化器感染症の患者はいない。近隣医療機関は気仙沼市立病院。

気仙沼市総合体育館（K-WAVE）

・巡回中に、新規インフルエンザ患者が多数発生したらしいと気仙沼市立病院より情報があったため、急遽訪問した。実際は 5 名であったが、訪問中に 2 名の追加発生報告があり、新規発生者は計 7 人であった。

・これまでは散発的な発生であったが、最近 2 日間では発症者のそばで生活していた人からの発生割合が高くなっていた。複合施設のため広間が多数あるが、一部（サブアリーナ）で特に患者集積が認められた。

・同避難所をよく把握している看護師（愛知からのボランティア）からは、様々な地域から避難者が集まっているため、見知らぬ者同士の場合が多く、共同生活上の協力が得られない場面がしばしばあることや、看護師から有症者に対するマスク着用や行動制限への依頼にも応じない避難者が多々いる、といった情報が得られた。

・複数の医療支援チームが活動しており、医療については充実している。

・看護師に発生状況の説明を受け、発生個所の観察等を実施した。また大分県からボランティアで訪問中であったインフルエンザ対策に詳しい医師（山内医師、佐伯保養院）も混じえ、予防投薬を含めた感染拡大防止策を協議し、医療支援チームに対応策を提示した。（資料１）

・施設内には遊具などがそろったキッズルームがあり、閉鎖すべきかどうかが検討されたが、インフルエンザ発症者の中で小児患者は１名のみと、その時点で限定的であったこと、避難中のストレス発散に重要であることから、最終的には閉鎖は行わなかった。ただし、キッズルーム入室前後のアルコール手指消毒および有症状者の利用禁止を徹底することとし、さらに小児を対象に保育士が感染予防策やアルコール手指消毒剤の使い方について、遊び形式で説明を行った。